

DXハイスクール伴走支援事業

# ブロック別の取組実践発表会

・研究協議会実施レポート

－ 11/19実施東海ブロック－



### 実践発表会①（静岡県立沼津東高等学校）

#### 実践発表内容

#### 実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	静岡県立沼津東高等学校
発表テーマ	外部専門人材の活用・関連機関等との連携
発表内容要旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 取組の概要                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● 探究学習に必要なスキルとして理数科に情報Ⅱを開設</li> <li>● 学校をあげて沼東ゼミ等の体制構築及び、令和6年度は基盤整備として教員の意識改革を推進                             <ul style="list-style-type: none"> <li>- P C 教室整備、探究活動の充実、情報Ⅱ 開設準備に注力。P C 40台、高性能 P C 3台、プリンタ・スキャナを7台設置</li> <li>- 沼津高専との教員連携を実施し、情報Ⅱの専門スキルを持つ教授と連携</li> </ul> </li> <li>● 令和7年度は教員と生徒のAIスキル向上に取り組む                             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 教員向け生成 A I 講座を活用</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>■ 授業がうまくいったポイント                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● スピード感を持った意思決定。情報教員1名のみ声では無しえない為、管理職も「情報」を学び、他教員へ啓蒙</li> <li>● 学校行事へ情報Ⅱを組み込み</li> </ul> </li> <li>■ 直面した課題と対応策                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● 今後の課題として、持続可能な A I 活用や人材育成</li> </ul> </li> </ul>

指導・助言者によるFB	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 属人化させるのではなく、学校全体で先生の意識を変え、生成AIの活用に取り組んでいるのは良い点である</li> <li>■ 教員が生成 A I 研修を受講した結果、どのように授業で活用し、生徒がどのような効果を得たかが重要である</li> <li>■ 生徒向けの研修の中で、高校生が中学生に教える取組は、外部人材を活用した学びとは異なり、高校生が自発的に学びかけを与える有意義な活動だと感じる</li> </ul>
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 外部連携において、どのような点が最も苦労されたか？ ⇒1番苦労したのは意思決定。大規模アンケートを取るわけにはいかず、何が生徒や先生に必要なかの判断に「悩んだ」</li> <li>■ 学校をまたいで、探究を推進することで苦労された点は何か？ ⇒先生の探究の苦手意識を打ち消すことが重要であった。講演会への参加等よりも、AI研修による先生のスキルアップが1番効果が高かった。先生のやる気が出るのが良い。また、探究の伴走は難しいのでAIにやらせれば良いという話も出ており、フィードバックシステム（Qareer）と契約し、A I に入力して探究の壁打ちが出来るようになった。</li> </ul>



### 実践発表会②（愛知県立愛知総合工科高等学校）

#### 実践発表内容

#### 実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	愛知県立愛知総合工科高等学校
発表テーマ	文理横断的・探究的な学びにおけるデジタルの活用方法
発表内容要旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 取組の概要                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● DXハイスクール事業を「探究の加速器」と位置づけ、デスクトップPC、3Dプリンター、Meta Quest、VERSALABを設置</li> <li>● 3年生の課題研究の取組テーマは、文理横断の多岐にわたり、理系領域だけではなく、社会科学の領域にも及ぶ</li> </ul> </li> <li>■ 授業がうまくいったポイント                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● 1つ目は、AI時代の人間とAIの役割分担として、認知リソースを再配分。分析に時間を使えた</li> <li>● 2つ目は、Cosenseによる知のネットワーク化</li> <li>● 3つ目は、課題ファーストの文化が醸成。技術起点ではなく、体験や社会課題起点ヘシフト</li> </ul> </li> <li>■ 直面した課題と対応策                     <ul style="list-style-type: none"> <li>● 1つ目は、探究が高度化することにより、試作から社会実装へのデプロイの壁</li> <li>● 2つ目は、検証に必要なリアルデータへのアクセスの壁</li> <li>● 3つ目は、商用アプリとの明らかな性能差</li> </ul> </li> </ul>

指導・助言者によるFB	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 先進的なデジタル活動と実践的な学びの提供という側面で、多様かつ実践的な活動という印象を受けた。総合工科ではなく普通科でどのように出来るかは気になる点である</li> <li>■ 文理横断的な探究活動について、生徒が設定した興味関心を起点としつつ、社会課題に直結している点は情報Ⅱの目的を体現しており、素晴らしい</li> <li>■ Cosenseを活用して知見を体系化出来ている点は価値が高い取り組みである。現状、Cosenseは校内限定にとどまっていると思うが、今後生徒の発表物を安全に他校に共有出来れば、より重要なリソースになり得ると感じる</li> </ul>
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 先生自身がモチベーションを維持する方法は何か？ ⇒生徒と先生が交流する場を作ることや、YouTubeやXでの最新の情報収集にも努めている</li> <li>■ 探究学習における問いの立て方の指導法を知りたい ⇒初期段階では、課題研究メソッドという教材をもとに全員を会議室に集めて、KJ法などでアイデア出しを実施</li> <li>■ 3Dプリンタの活用は、工夫されている点はあるか ⇒3Dプリンターは出力に時間がかかる。出力時間を考慮し、授業内でアウトプットを完成させることが大切</li> <li>■ 民間事業者に期待する点は何か ⇒夢を持った生徒に対して、企業でしか出来ないことを指導していただくと、生徒は喜ぶだろう</li> </ul>

# グループ協議① 発表内容

協議テーマ	参加校数 (グループ数)		グループ協議の発表内容
文理横断的・探究的な学びにおけるデジタルの活用方法	66校 (10グループ)		グループ2 <ul style="list-style-type: none"><li>● 協議には7つの学校が参加し、3つの学校では全学科でDXハイスクールの取組を推進、4つの学校は一部学科のみに留まる</li><li>● 全ての学科で実施したいのが本音だが、試行錯誤している最中である</li><li>● 今後はDXハイスクールサポート窓口の利用や本イベントで学んだことを活用したい。また、取組が一部学科に留まっている学校は、他の学科にも広げていきたいという議論を行った</li></ul>
外部専門人材の活用・関連機関等との連携	52校 (7グループ)		グループ11 <ul style="list-style-type: none"><li>● 外部連携というテーマの下、各学校が大学との連携、事業者との連携を推進していた</li><li>● 各学校、機器は導入している一方でそれらを上手く利用出来ていない課題がある。外部事業者を利用し、よりよい使い方を模索している</li><li>● 本校では、DXハイスクール1年目で機器が整っていないが、大学と連携は始めている。機器が整い次第、建築の専門分野を外部と連携して生徒に還元していきたいと考えている</li></ul>

# グループ協議② 発表内容

協議テーマ	参加校数 (グループ数)	グループ協議の発表内容	
情報Ⅱ等の授業での取組	13校 (2グループ)	<div style="background-color: #f4a460; padding: 5px;">情報Ⅱ等の開設・カリキュラム編成</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center; margin: 5px 0;">グループD2</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム開設を大きくとらえると学校全体で取り組むことの難しさを感じられた</li> <li>来年度から情報Ⅱを開設するといった中で、情報の専門の先生が担当するという話だったが、全学校が情報Ⅱの先生を揃えることは出来ない</li> <li>全学校がDXの最終目標に向かえるかは不安を感じられていた</li> <li>この協議会のような取り組みを各学校へ持ち帰ることが大切だと意見がまとまった</li> </ul>
情報Ⅱ等の開設・カリキュラム編成	11校 (2グループ)		
デジタルスペースの環境整備	17校 (3グループ)		
文理横断的・探究的な学びにおけるデジタル活用	15校 (2グループ)		
デジタルの活用等に関連した校内研修の実施	19校 (3グループ)	<div style="background-color: #76e1d3; padding: 5px;">生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center; margin: 5px 0;">グループE</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課外活動について、小学校・中学校と連携している取り組み等が挙げられた。</li> <li>特に関心を持ったのは、岐阜県多治見北高校が、部活動としてDXハイスクールの活動を行っている点。生徒が動画作成や、プロジェクションマッピングを手掛けるなど、主体的な活動を行っており、参考としたい</li> </ul>
生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進	34校 (5グループ)		
外部専門人材の活用・関連機関等との連携	10校 (2グループ)		